日本学校教育相談学会岐阜県支部　　第１７号　平成 28 年 9 月 30 日　発行

岐阜県支部 だより

1　巻頭言
2　支部研修会報告その 1
3　全国大会報告
4　支部研修会報告その 2
　　事務局より

巻頭言　教育相談の視点で集団づくりを！

――　私のピア・サポートの今！　――

岐阜大学　山田日吉

まだ２０代の頃、寝食を忘れて取り組んだのが学級集団づくりと学習集団づくりでした。キャッチフレーズとして当時よく使われた言葉に「一人はみんなのために、みんなは一人のために」があります。そんな学級集団を目指し、様々な民間研究団体の研究会に顔を出し、実践を発表したものです。３０代中頃になって、國學院大學の竹内常一さんの『子どもの自分くずしと自分つくり』という本を読み、子どもの思春期統合の難しさが集団づくりに大いに影響していることを知りました。また､その頃愛知教育大学の折出健二先生から「これからの集団づくりは、一人一人の児童生徒の発達を掛け合わせて行うことが求められる。」とアドバイスされました。そこで､子どもの発達を学び、集団づくりに活かそうと決意し、大学院で臨床心理学を学びました。しかし､当時の臨床心理学は、フロイトを中心とした力動的精神分析をベースにしたもの。そのままでは学校教育に活かすことは難しいと考え、なんとか臨床心理学の知見を学校教育で生かす方法はないかと、血眼になって探し回りました。そして、出会ったのが SFA とピア・サポート。中でもピア・サポートはそれまで取り組んでいた SGE や SST、アサーション、ストレスマネジメント等の様々な心理教育プログラムを取り込みながら、出口にサポート活動があるという点で、私にとっては納得できる理論と実践の具体例がありました。既に担任は出来ない立場になっていましたが、それでも勤務する学校でピア・サポートを実践する事に力を注ぎました。その中で、学校自体が大きく変化しよくなっていくことを実感しました。児童生徒の姿だけではなく、教職員の協働性が高まったり、学校の風土が建設的になったりしたと感じたのです。

日本学校教育相談学会現会長の栗原先生が岡山県総社市、新潟市、岐阜市などで取り組んでいる MLA も、その中核はピア・サポートです。MLA は私流に言い換えれば、個々の児童生徒の人間関係づくりのためのコミュニケーション能力を、授業では協同学習を通じ、授業外では、ピア・サポート活動を通じて高める指導法なのです。つまり、いじめを例に取れば、傍観者の層における集団逃避を食い止め、いじめの仲介者を育てることに寄与するのが MLA なのです。３５年前、まさに、折出健二先生が指摘された「集団づくりに一人一人の児童生徒の発達を掛け合わせること」がピア・サポートを中核にした MLA なのだと考えます。教育相談の視点で行う集団づくりだと言い換えることができると思うのです。一人でも多くの先生方に、ピア・サポートを学んでほしいと考えています。

現在年７回のピア・サポート・ステップアップ研修を陽南中で実施しています。

また、来年１月７日・８日はハートフル G で学会認定プログラムによるトレーナー養成講座も実施します。相談学会会員の皆さんの参加を心よりお待ちしています。（詳細は、大竹理事長からお聞きください。）

☆ 支部研究会報告 その1☆

◇ 定期総会・記念講演（第１回研修会）

開催日：平成２８年６月１１日（土）
会　場：岐阜大学教育学部附属小学校

◎定期総会　１４：００～１４：３０

今年度の研修会が、いよいよ始まりました。開会のあいさつでは、大竹理事長が北海道で起きた「置き去り事件」を話題に取り上げ、親の子育てについて話されました。「しつけ」という言葉は「しつけ糸」からきているそうです。「しつけ」は、本縫いを正確に行うために、あらかじめざっと縫っておくものです。だから、「しつけ糸」は太いけれどすぐに切れるようになっているはず。でも、最近の親は初めから「本縫い」をしようとしてしまっているように感じられると話されました。

多くの親が自分の子育てに自信がもてず悩んでいる中で、時に、私たちは親支援も求められます。私たちにできることは何か。難しい課題ですが、それを避けては通れない現状を改めて感じました。

◎記念講演　１４：３０～１６：００

「児童・生徒の９０年人生を見わたして
～不登校児童・生徒の予防と支援～」
岐阜聖徳学園大学　教育学部　教授
譲　西賢先生

まず、２００３年「附属池田小事件」と２００８年「秋葉原通り魔事件」の二つの大きな事件を取り上げられ、この犯人となった二人の共通点から『小・中学校の時代は結構いい子だったのに、たった数年で死刑を執行されるような事件を起こしてしまう。それは、なぜなのだろうか・・・。』という疑問を投げかけられました。そして更に、そのいい子だった時代に関わった私たちが、何に気付いていかねばならなかったのだろうかと課題を導き出され、子供達の「今」の姿ではなく、「人生９０年を生きていくため、我々がどんな力を育てるべきなのか」という今日のテーマを与えてくださいました。キーワードは、「予防的カウンセリング」

現代の家庭は、とても忙しい。以前は家に帰ると家の誰かが「今日、どうだった？」と声を掛けたものですが、現代ではそういった時間がなかなかもてません。その結果、自分の思いを表出し、解消してもらうことがなかなかできず、ストレスを溜めていく子供達がたくさんいます。家の中で、感情受容してもらえる場がなくなっているのです。

例えば、友達を叩いてしまったということがあった場合。親は、「どうして友達を叩いたの？」と聞くでしょう。子供から「だって、めちゃくちゃむかついたから。」と返ってくると、時間に余裕がない場合「叩いたらあかんやろ！」とすぐに道理を理解させようとします。そうではなく「叩きたくなるほど、むかついたんやね。どうして？」と、まず子供の感情を受容しながら、「何にむかついたのか。」「なぜ、自分が叩くまで腹が立ったのか。」を自己洞察・自己受容をさせ、「では、どうするとよかったのか。」という「自己治癒力」を身に付ける機会にしていくことが大切なのです。そして、感情受容をしてもらうことで、「私は私。これでいいのだ。」と自己肯定感が子供に育まれていきます。

しかし、家庭に感情受容をする時間と力が失われ、子供の自己肯定感がなかなか育たない現代社会で、その役割を担うことができるのは学校しかありません。現在、いい子になりたいとがんばっている子供達に対し、これこそが９０年人生を見渡した上で、今私たちがやるべき「予防的カウンセリング」ではないかということを教えていただいきました。（文責：木村由紀）

☆ 全国大会報告 ☆

◇ 日本学校教育相談学会主催
第２８回総会・研究大会（岡山大会）

開催日：平成２８年８月５日～７日
会　場：岡山市（ピュアリティまきび）
<主な日程>
８月５日（金）ワークショップ（６コース）
全国支部代表者会
８月６日（土）総会、記念講演、研究・事例発表、ポスター発表、自主シンポジウム、懇親会
８月７日（日）研究・事例発表、自主シンポジウム、学会賞・小泉英二賞受賞者講演、ラウンドテーブル

◎報告１　夏季ワークショップ（８月５日）

兵庫教育大学　藤原　忠雄先生
「学校におけるストレスマネジメント教育」

ストレスマネジメントとは、ストレスとつきあい上手になることです。現代社会はストレス社会と言われており、この社会でよりよく生きるためには、必要なスキルです。このようなスキルを習得し、日常生活で活用できるように支援するのが、ストレスマネジメント教育です。

ストレスの対極にあるのがリラックスですが、ストレスを少なくするためには、リラックス上手になることです。リラックス上手になれば、ストレスとつきあい上手になります。さらに、生き方上手になれるということです。

ストレスマネジメントとは、ストレスに対する自己コントロールを効果的に行えるようにすることです。言い換えれば、ストレスとつきあい上手になることです。

そのためには、ストレスマネジメントの4つの段階を理解し、習得することが大切です。その4つの段階とは、次の通りです。

1, ストレスの理解
2, ストレスへの気付き
3, ストレス対処法の習得
4, ストレス対処法の活用

「ストレスの理解」では、ストレスを悪いものとしてとらえません。ストレスには善玉ストレス（ユーストレス）と悪玉ストレス（ディストレス）があります。

善玉ストレスは、苦しいけれども達成すればよいことが待っている状態です。例えば、受験はストレスなことですが、悪いことではありません。人として向き合っていくことにつながります。

一方、悪玉ストレスは、継続すると病気や不適応に陥ってしまうような、処理不可能なストレスです。
いじめや虐待、騒音などがあります。

ストレスは、この刺激（ストレッサー）を評価（認知）し、心と体がどのように反応し、どう受け止めるかによって、行動に（対処）表れる表れ方なのです。

「ストレスへの気付き」では、自分にとってのストレッサーや自分自身のストレス反応に気付くことは、その到来を予測でき、ストレッサーを制御できることが分かれば、ストレス反応の度合は低下するそうです。

「ストレス対処法の習得」では、その対処法として、
①心身のリラクセイション
②心理的構え
③コミュニケーションスキル
④ストレス反応の少ない生活様式
と、4つあることを学びました。ストレス対処法を一人で、必要に応じて行うことで、ストレスに対して主体的に対処できるように生き方が変わってくることを実感しました。

◎報告２　自主シンポジウム　（８月６日）

◇企画者：大阪国際大学　米田　薫先生
「心理教育が果たす役割と可能性（２）
～普及と発展を目指して～　」

今日、我が国の学校教育に果たす心理教育の役割は、ますます重要になってきています。その中で、ピア・サポート、SEL－8S、キラキラプログラムの、3つの心理教育プログラムを実践している先生が発表されました。

それぞれの心理教育プログラムの立場から、現状とさらなる普及・発展を図るために、実施者の養成に焦点を当てて発表がありました。

以下のような方法を取り入れて、普及や発展を工夫している報告がありました。

・心理教育プログラムと、学校教育・学校組織をマネジメントする力が必要であること。
・教員養成段階で心理プログラムを実施することを検討すること。
・実践者に高い力量が求められるので、理念を堅持しつつ、実施計画書の提出やフィードバックなど、5つの内容の遵守をメンバーに求めていること。

参加者は、様々な立場の方が多く、それぞれの立場から、心理教育プログラムについて、自分の実践や学校教育に普及させている体験を交流しました。

（文責　幸脇弥生）

☆ 支部研究会報告 その2☆

◇ 夏の教育相談研修会（第２回研修会）

開催日：平成２８年8月２７日（土）
会　場：ハートフルG　大研修室

◎報告

◇金沢大学　人間社会研究域　学校教育系
准教授　原田　克巳先生
「チーム援助・チーム支援を大切にした
学級学校づくり」

学校現場においては、社会のグローバル化や激しい変化により問題が複雑化、多様化するケースも少なからずあり、「チームとしての学校」の実現が求められています。アクティブラーニングの視点からの授業改善、教職員の指導体制の充実や教員以外のスタッフの参画など、専門性に基づくチーム体制の構築や学校のマネジメント機能の強化は、喫緊の課題であると、その必要性を先生は冒頭に話されました。

学校が、より困難度を増している生徒指導上の課題やいじめなど、子供達の生命や身体や教育を受ける権利が脅かされるような事案があります。校内の情報共有や専門機関との連携が不足し、子供達のSOSが見過ごされている場合も少なからずあります。そんな時は校長のリーダーシップの下、構成する個々人がそれぞれの立場や役割を認識しつつ、情報を共有し、課題に対応していく必要があります。学校と家庭・地域との連携協働によって、ともに子供の成長を支えていく体制づくりが必要であると、各地で多くの研修会が開かれています。

まずは、児童生徒への接し方を教師自身が見直し、子供の心に届く指導を心掛けること。また、できないことばかりでなく児童生徒のよい部分に目を向け、信頼感や肯定的感情をベースに教育相談を中心的役割を担うものとすることが大切だと、「不登校」「自殺」「自傷」を例に挙げながら話されました。「教師自身もまた、いじめを生む構図の中にあること」、「何気ない態度こそ重要、子供は教師の背中を見ています。」の言葉にハッとしました。学習環境の基盤となる居場所づくりや絆づくり、安心感と安全こそが「チーム学校」に求められるものだと知りました。かつて不登校の生徒が、「みんなと一緒に当たり前のことができる自分になりたい・・・。」とつぶやいたことを思い出しました。

「私自身これまで多くの大人の手を借りて生きてきました。これが私の自立感です。」の先生のしめくくりの言葉に、日頃から人の手を借りることは悪いことや恥ずかしいことではなく、互助関係を結ぶことこそが自立にとって大切なことであると学びました。

（文責　佐藤礼子）

事務局より

一緒に事例発表してみませんか

2学期が始まりました。新学期の期待感溢れるスタートと異なり、9月の初めから登校しぶりや不登校が増えてきます。また、ニュースでも取り上げられていましたが、最悪の場合には自殺という結果に至ってしまうことが多いのも、この2学期の特徴です。

学校教育相談にかかわっている私たちが、中心となり、チームをつくり、この時期をピンチではなくチャンスに変えていくような取組をしていきたいものです。

今年度の夏の教育相談研修会では、「チーム援助・チーム支援を大切にした学級・学校づくり」というテーマで、金沢大学准教授の原田克巳先生にご講演いただきました。校種だけでなく、教諭、養護教諭、相談員と立場もさまざまなのがこの学会の特徴です。それらをメリットに変えていける「PCAGIP法／インシデント・プロセス法」による事例検討会の方法などをご教授いただきました。今後の学会の事例研究会でも早速、活用していけそうな内容でした。

今年度の活動として、今後3回（10 月、12 月、2 月）の研修会があります。先ほどもお伝えしたように、どの回でも「事例研究会」を計画しています。会員の皆様の中で、「ちょっと相談してみたいな」「詳しく教えてほしいな」という事例がありましたら、気軽に事務局まで問い合わせをしてください。また、「一人では資料をどうまとめてよいか分からない」「どんな研究会になってしまうか不安」という方は、研修委員が資料のまとめ方や研究会の進め方まで相談にのります。様々な立場の先生からの意見をいただける、数少ない機会です。多くの先生方の発表をお待ちしております。
（発表を希望される方は事務局までご連絡ください。）

（事務局長　郷田賢）

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第 17 号
２０１６年（平成２８年）９月３０日発行
発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部
編集：日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会
ホームページ：http://jascg-gifu.net/